

二〇二三年度

豊島岡女子学園中学校

入学試験問題

(一回)

# 国語

## 注意事項

- 一. 合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 二. 問題は  から 、2 ページから 19 ページまであります。  
合図があったら確認してください。
- 三. 解答は、すべて指示に従って解答らんに記入してください。

□ 次の文章を読んで、後の一から九までの各問いに答えなさい。

(ただし、**字数指定のある問いはすべて句読点・記号も一字とする。**)

一心不乱に勉強している人を見ると、「あの人はやる気のある人だなあ」と思うことはありますが、ブウンブウンと音を立てて一心不乱に掃除そうじしているルンバ\*を見て、①「あのルンバはやる気があるなあ」とは感じないでしょう。

不思議な気がしますが、なぜこのように人とルンバに対して異なった感情が芽生えるのでしょうか。

それは動くための力のありかが違うちがことを知っているからです。

ルンバが動くことができるのは、ルンバの内部からの力ではなく、外部からの力、すなわち、電力によって動力を得ているからです。

ルンバに限らず機械が動くためには、外部から電力やガソリンなどの物理的な力が供給される必要があります。その力を得た後に、スイッチをいれると動き出します。それに比べて、人間は外部による力で動くことはあまりありません。むしろ、人間(やあらゆる種の動物)は、内部からのやる気によって自ら行動を起こします。

そのように考えると、「やる気」とは、人間の内部に存在している力のことだということがわかります。もう少し説明を加えると、「やる気」とは、ある行動を引き起こし、その行動を持続させ、結果として一定の方向に導く心理的過程のことだといえるでしょう。

ちよつと難しく感じたかもしれませんね。それではみなさんに身近な勉強を例にやる気を説明してみましょう。「やる気」とは、「勉強する」という行動を引き起こして、「勉強する」という行動を持続させ、結果として、成績が向上するような過程であると考  
えられます。少しはわかりやすくなつたのではないでしょうか。

つまり、ある行動を引き起こして、それを持続させる源(力)が「やる気」なのです。一般的には②「やる気スイッチ」などと

いうように、行動を引き起こすことに重点がおかれがちですが、持続させる力という点もあることに注意しましょう。

ただし、「やる気」は、勉強や運動に対してだけ使うものではありません。お母さんの手伝いをする<sup>せいとん</sup>ことだったり、部屋を整理することだったり、ゲームをすることだったり、すべての行動を引き起こす源のことをいいます。

(中略)

冒頭<sup>ぼうとう</sup>のルンバの説明では、外からの力で動くものには「やる気」を感じないと単純化して話しましたが、実は、やる気には、「外から与えられるやる気」もあります。そのため、「内からわき出るやる気」と「外から与えられるやる気」の二つに大きく分けられます。心理学の学術用語では、それぞれ「内発的動機づけ」と「外発的動機づけ」といいます。

「内からわき出るやる気」(以後、「内からのやる気」ということにします)とは、③行動自体が目的とな<sup>め</sup>っているやる気、つまり、自分の行動の理由が好奇心<sup>こうきしん</sup>や興味・関心から生じている状態のことをいいます。

ゲームに夢中になっている子どもたちの多くは、ゲームが楽しくてゲームをしている(一般化<sup>いっぱんか</sup>するとその行動にAジュウジしている)のであって、何も、将来、ゲームに関わる職業にBツキたいからでも、誰か<sup>だれ</sup>に褒め<sup>ほ</sup>られたいからでもありません。

このように、内からのやる気に基づいた行動は、行動そのものが目的となっており、他に何か目的があ<sup>あ</sup>って行動しているわけではありません。まさに「やりたいからやる」というもの。そのCコンテイには、面白いから、楽しいからやるといった、その活動に対する興味・関心があります。

新しいことを知りたいから勉強をしている、あるいは、楽しいから、好きだから勉強をしているみなさんは、内からのやる気に基づいて勉強している(行動している)こととなります。

一方、「外から与えられるやる気」(以後、「外からのやる気」ということにします)は、自分の行動が外部(他人や環境<sup>かんきょう</sup>)からの報酬<sup>ほうしゅう</sup>や罰<sup>ばつ</sup>、命令、義務によって生じている状態です。

たとえば、良い成績をとって親に褒め<sup>ほ</sup>られたいから勉強をしたり、親に叱<sup>しか</sup>られるのが嫌<sup>いや</sup>だからしぶしぶお手伝いをするといった、

XとYに基づく行動がこれにあたります。④義務と命令による「やる気」という違和感があるかもしれませんが、心理学ではこれらも動機づけという文脈では「やる気」と捉えます。

外からのやる気に基づいた行動は、何らかの目的を達成するための手段であるといえます。「〇〇をしたいから△△する」、あるいは「〇〇をしたくないから△△する」というもので、ここでは〇〇をする（しない）が目的、△△するが手段となります。

では、内からのやる気と外からのやる気の違いはどこにあるのでしょうか？

それは、内からのやる気では、行動することが目的であり（簡単にいうと、「やりたいからやる！」）、外からのやる気では、行動することが手段である点です（「〇〇したいからやる」、「〇〇したくないからやる」）。⑤言い換えれば、「目的—手段」の観点から、やる気を分類しているのです。

(中略)

それでは、内からのやる気と外からのやる気、どちらが心理学のなかで先に見いだされたのでしょうか。

答えは外からのやる気です。やる気といえば内からというイメージがある読者のみなさんには、意外な感じがするかもしれませんが、  
んね。

実は、人間（やある種の動物）に内からのやる気が存在することが広く認められたのは、一九七〇年代に入ってからになります。中高生の読者のみなさんにとっては昔のことと感ずるかもしれませんが、心理学の歴史からいえば割と最近のことといえるでしょう。それまでは、人間が行動を起こすのは、すべて、外からの働きかけによると考えられていたのです。

一九五〇年代まで、心理学の世界は、行動主義心理学と呼ばれる心理学が主流で、動物を対象にした実験によって行動について研究していました。行動主義心理学というのは、人間や動物の意識や動機、感情を考慮せずに、目に見える行動だけに着目した心理学のことをいいます。

行動主義心理学の基本的な理論に、オペラント条件づけというものがあります。これは、動物（人間）がたまたま何か行動した

直後に、報酬（多くはエサ）を与えることで、その行動を学習させる手続きを意味します。

たとえば、ねずみにレバーを押すという行動を学習させたいときに、ねずみがさまざまな行動をとる中で、たまたまレバーを押すという行動を自発した直後に、エサを与えます。それを何度もくり返すことによって、ねずみは意図的にレバーを押すという行動を学習します。

また、ある行動を減少、あるいは消失させたいときには、罰（多くは電気ショック）を使います。たとえば、報酬によってレバーを押すという行動を学習させたねずみに、今度は、レバーを押さないようにするとき、レバーを押すと電気ショックが流れるというような罰を与えることで、ねずみはレバーを押さなくなります。

こうしたオペラント条件づけは、動物にさまざまな行動を学習させる（訓練する）ための方法として広く活用されています。犬にお座りをさせることだったり、水族館のショーで見られるイルカの大きなジャンプだったり、サーカスで見られるゾウの玉乗りだったり。

行動主義心理学が主流であった一九五〇年代まで、人間の行動も動物と同じく、学習は適切に報酬や罰を与えることによって、成立すると考えられていました。つまり、人間が行動を起こすためには、先に説明したオペラント条件づけのねずみのように、

**X**と**Y**の力が必要であり、外からの働きかけがないと、われわれは行動を起こさないと考えられていたのです。

〔注〕 ＊ ルンバⅡロボット掃除機の商品名。

（『勉強する気はなぜ起こらないのか』 外山 美樹）

問一 ―線A「ジュウジ」・B「ツキ」・C「コンテイ」のカタカナを正しい漢字に直しなさい。

（一画一画でいいにはつきりと書くこと。送り仮名が必要な場合、それも解答らんに書きなさい。）

問二 —線① 『あのルンバはやる気があるなあ』とは感じないでしょう」とありますが、なぜですか。その理由として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人間は外部による力で動くことはあまりないことだと感じているから。

イ 動くための力のありかの違いによってどれくらい「やる気」があるかを見極められるから。

ウ ルンバが動くのは、外部から「やる気」を得ているためだと理解しているから。

エ 人とルンバに対して異なった感情が芽生えるのが人として普通のことだと思っているから。

オ 「やる気」とは、人間の内部に存在している力のことだと考えているから。

問三 —線② 『やる気スイッチ』とありますが、ここではどういうものだと考えられますか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 外部からそのスイッチを他人が押すことで、やる気を起こさせることができるもの。

イ 内部にあるやる気を起こさせるスイッチで、他人が押すことのできないもの。

ウ そのスイッチを押すことで、押された人にある行動を起こさせるもの。

エ そのスイッチを押すことで、押された人に行動を起こさせ、その行動を持続させるもの。

オ 外部からスイッチを押すことで、押された人をやる気にさせ、その結果成功に導くもの。

問四 —線③ 「行動自体が目的」となっているやる気」とありますが、これを「勉強」で考えた場合、どのような気持ちだと考えられますか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 勉強すること自体に喜びや意味を見出し、勉強することに積極的になっている気持ち。

イ 自分の興味や関心のあるものを探し求め、結果として勉強することを惜しまない気持ち。

ウ 自分の好きだという気持ちを大切に、自分のやりたいときにだけ勉強をするという気持ち。

エ 将来の夢や目標とするものをかなえるために、今は大変でも勉強をしておこうという気持ち。  
オ 勉強をする中できちんと自分なりの目的をもって、それに見合う勉強をするという気持ち。

問五 空らん 

X
---

・

Y
---

に入る語を考え、慣用表現を完成させなさい。ただし、それぞれカタカナ二字で答えること。

問六 |線④「義務と命令にく捉えとらます」とありますが、どういことですか。その説明として最も適当なものを次のア〜オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 義務と命令は親などの第三者によって生じるものだと一般的には考えられているが、心理学上は第三者の働きかけをもとに自発的な「やる気」が生じていると考えられているということ。

イ 義務と命令は「やる気」をなくさせるものであり「やる気」とは反するものと一般的には考えられているが、心理学上では積極的に「やる気」を起こさせるものとして考えられているということ。

ウ 義務と命令は「外からのやる気」であって「内からのやる気」とは区別されると一般的には考えられているが、心理学上ではどちらも同じものとして区別せずに考えられているということ。

エ 義務と命令は外部から強制されるものなので「やる気」とは関係ないと一般的には考えられているが、心理学上では行動を引き起こすためにそれらから生じるものも「やる気」と考えられているということ。

オ 義務と命令は当人が仕方なしに行動するため「やる気」が感じられないと一般的には考えられているが、心理学上は「やる気」が感じられるかどうかよりも行動しているかどうかが重要だと考えられているということ。

問七 |線⑤「言い換えかれば、くいるのです」とありますが、どういことですか。その説明として最も適当なものを次のア〜オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 行動することが目的と関連しているのか、それとも関連していないのかで、やる気を区別できるということ。

イ 目的として行動そのものを行っているか、目的のために行動を行っているかで、やる気を区別できるということ。

ウ 行動することを通じて目的を達成しようとするか、行動を単なる手段とするかで、やる気を区別できるということ。

エ 目的を先に設定して行動をしていくか、行動した先に目的が生じるものとするかで、やる気を区別できるということ。

オ 目的として行動自体に興味を見出すか、手段でしかないので興味は見出さないかで、やる気を区別できるということ。

問八 本文の後、筆者は、「やる気」に関しての一般的な考え方の転換点となった「アカゲザル（サル的一种）」による実験を紹介

しています。それはどのような実験だったと考えられますか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア オペラント条件づけによりアカゲザルにパズルを解かせようとしたところ、報酬も罰も与えない内に熱心にパズルを解き始め、その方法を理解するようになったという実験。

イ 最初は報酬と罰によってアカゲザルにパズルを解かせていたが、そのうちにパズルを与えただけで何も報酬や罰を与えなくとも解けるようになるまで学習したという実験。

ウ 他の動物にパズルを解かせようとしても一切興味・関心を持たなかったのに対し、アカゲザルだけがパズルに興味を持ち、自力で解けるようになるまでに成長したという実験。

エ ねずみなどの動物にはいくら報酬や罰を与えても解くことのできなかつたパズルを、アカゲザルは報酬や罰を与えられることなく容易に解けてしまったという実験。

オ 他の動物はオペラント条件づけによりパズルを解けるようになったが、アカゲザルはオペラント条件づけをしても解けるサルと解けないサルとに分かれてしまったという実験。

問九 本文中で筆者は「やる気」というものをどのようなものとしてとらえていますか。七十字以上九十字以内で答えなさい。



二 次の文章を読んで、後の一から九までの各問いに答えなさい。

(ただし、字数指定のある問いはすべて句読点・記号も一字とする。)

八月二十四日の夕方、僕は藤巻邸を訪ねた。

辞書で「①処暑」をひいてみたところ、やはり暑さがやむ時期という意味らしい。この日は毎年、庭で花火をするのだと和也が教えてくれた。夏らしいことをして、夏の終わりをしめくくろうという趣向だろうか。てつきり東京のならわしなのかと思ったら、藤巻家独自の恒例行事だという。

まずはいつものように和也の勉強を見てやった後、ふたりで部屋を出た。磨き抜かれた廊下を玄関とは逆の方向に進み、左手の襖を開けると、中は十畳ほどの和室だった。床の間に掛け軸が飾られ、黄色い花が生けてある。中央の細長い座卓に、奥さんが箸や食器を並べていた。

藤巻先生もいた。奥の縁側に、こちらには背を向けて座っている。「お父さん」と和也が呼んでも応えない。庭を眺めているふうにも見えるけれど、視線の先にあるのはおそらく植木や花壇ではなく、その上に広がる空だろう。研究熱心なのは自宅でも変わらないうだ。

「いつもこうなんだ」

② 和也は僕に向かって眉を上げてみせ、母親とも目を見かわした。それは僕も知っている。

床の間を背にして、腰を下ろした。正面に先生、その横が奥さん、和也は僕の隣という席順である。考えてみれば、藤巻先生と食事をともにする機会は今まで一度もなかった。うれしい反面、なんだか緊張してくる。

主菜は鰻だった。ひとり分ずつ立派な黒塗りの器に入った鰻重は、昔からひいきにしている近所の店に届けてもらったという。これで一人前かとびっくりするほど大きい。たれのたっぷりからんだ身はふっくらと厚く、とろけるようにやわらかい。

「おいしいです、とても」

僕がうっとりしていると、奥さんも目もとをほころばせた。

「お口に合ってよかったです」

父子も一心に箸を動かしている。ただ父親のほうは、旨そうに鰻をほおばりながらも、ちらりちらりと外へ目をやっていた。厚ぼつたい層積雲が茜色に染まっている。

「雨がやんでよかったわね」

奥さんも夕焼け空を見上げた。台風の影響で、ここ二日ほどぐずついた天気が続いていたのだ。

「温帯低気圧に変わったから、もう大丈夫だろう。どうも今年は台風が少ないみたいだね」

先生が言う。

「でも、これからの季節が本番でしょう。去年みたいなことにならないといいけれど」

去年は台風の被害が相次いだ。夏の台風八号は、梅雨前線を刺激して大雨を降らせ、各地で洪水や地すべりを引き起こした。秋の台風十六号もまた強力で、都内でも、多摩川が氾濫して住宅が流されるという惨事が起きた。一軒家がなすすべもなく濁流にのみこまれていく衝撃的な映像が、連日テレビで報道されていた。

当時、僕はすでに藤巻研究室に顔を出すようになっていた。なんでこんなことになっちゃったのかね、と院生のひとりが新聞を読んで首をひねっていたので、ニュースで得た知識を披露した。上流のダムを放水したため川の流量が一気に増え、その勢いに耐えきれなくなった堤防がふたつとも決壊したようだ、と。

ああうん、それは知ってる、と彼は気のない調子で答えた。おれが考えてたのは、この台風の構造と、あとは進路のこと。

③僕は赤面した。(中略)

「ねえ、お父さんたちは天気の研究をしてるんでしょ」

和也が箸を置き、父親と僕を見比べた。

「被害が出ないように防げないわけ？」

「それは難しい」

藤巻先生は即座に答えた。

「気象は人間の力ではコントロールできない。雨や風を弱めることはできないし、雷も竜巻もとめられない」

「じゃあ、なんのために研究してるの？」

「和也がいぶかしげに眉根を寄せた。」

A 「知りたいからだよ。気象のしくみを」

B 「知っても、どうにもできないのに？」

C 「どうにもできなくても、知りたい」

D 「もちろん、まったく役に立たないわけじゃないですしね」

僕は見かねて口を挟んだ。

E 「天気を正確に予測できれば、前もって手を打てるから。家の窓や屋根を補強するように呼びかけたり、住民を避難させたり」

F 「だけど、家は流されちゃうんだよね？」

G 「まあでも、命が助かるのが一番じゃないの」

奥さんもとりなしてくれたが、

「やっばり、おれにはよくわかんないや」

「わからないことだらけだよ、この世界は」

先生がひとりごとのように言った。

「(目)だからこそ、おもしろい」

一時はどうなることかはらはらしたけれど、それ以降は和也が父親につつかかかるともなく、食事は和やかに進んだ。鰻をたいらげた後、デザートには西瓜が出た。

話していたのは主に、奥さんと和也だった。僕の学生生活についていくつか質問を受け、和也が幼かった時分の思い出話も聞いた。

中でも印象的だったのは、絵の話である。

朝起きたらまず空を観察するというのが、藤巻先生の長年の日課だという。晴れていれば庭に出て、雨の日には窓越しに、とつくりと眺める。そんな父親の姿に、幼い和也はおおいに好奇心をくすぐられたらしい。よちよち歩きで追いかけていっては、並んで空を見上げていたそう。熱視線の先に、なにかとてつもなくおもしろいものが浮かんでいるはずだと思ったのだろう。

「お父さんのまねをして、こう腰に手をあてて、あごをそらしてね。今にも後ろにひっくり返りそうで、見ているわたしはひやひやしちゃって」

奥さんは身ぶりをまじえて説明した。本人は覚えていないようで、首をかしげている。

「それで、後で空の絵を描くんですよ。お父さんに見せるんだ、って言って。親ばかかもしれないですけど、けっこうな力作で……そう、先生にも見ていただいたら？」

「親ばかだって。子どもの落書きだもん」

照れくさげに首を振った和也の横から、藤巻先生も口添えした。

「いや、わたしもひさしぶりに見たいね。あれはなかなかたいしたものだよ」

「へえ、お父さんがほめてくれるなんて、珍しいこともあるもんだね」

④ 冗談めかしてまぜ返しつつ、和也はまんざらでもなさそうに立ちあがった。

「あれ、どこにしまったっけ？」

「あなたの部屋じゃない？ 納戸か、書斎の押し入れかもね」

奥さんも後ろからついていき、僕は先生とふたりで和室に残された。

「先週貸していただいた本、もうじき読み終わりそうです。週明けにでもお返しします」

なにげなく切り出したところ、先生は目を輝かせた。

「あの超音波風速温度計は、実に画期的な発明だね」

超音波風速温度計のもたらした貢献について、活用事例について、今後検討すべき改良点について、堰を切ったように語り出す。

お絵描き帳が見あたらなかったのか、和也たちはなかなか帰ってこなかった。その間に、先生の話は加速度をつけて盛りあがった。

ようやく戻ってきたふたりが和室の入口で顔を見あわせているのを、僕は視界の端にとらえた。自分から水を向けた手前、話

の腰を折るのもためらわれ、どうしたものかと弱っていると、スケッチブックを小脇に抱えた和也がこちらへずんずん近づいてき

た。

「お父さん」

うん、と先生はおざなりな生返事をしたきり、見向きもしない。

「例の、南西諸島の海上観測でも役に立ったらしい。船体の揺れによる影響をどこまで補正できるかが課題だな」

「ねえ、あなた」

奥さんも困惑顔で呼びかけた。

と、先生がはっとしたように口をつぐんだ。僕は胸をなでおろした。たぶん奥さんも、それに和也も。

「ああ、スミ。悪いが、紙と鉛筆を持ってきてくれるかい」

先生は言った。和也が踵を返し、無言で部屋を出ていった。

おろおろしている奥さんにかわって、自室にひっこんでしまった和也を呼びにいく役目を僕が引き受けたのは、⑤少なからず責任を感じたからだ。

父親に絵をほめられたときに和也が浮かべた表情を、僕は見逃していなかった。雲間から一条の光が差すような、笑顔だった。いつだって陽気で快活で、いつそ軽薄な感じさえする子だけれど、あんな笑みははじめて見た。

「花火をしよう」

ドアを開けた和也に、僕は言った。

「おれはいい。先生がつきあつてあげれば？ そのほうが親父も喜ぶんじゃない？」

和也はけだるげに首を振った。険しい目つきも、ふてくされたような皮肉っぽい口ぶりも、ふだんの和也らしくない。僕は部屋に入り、後ろ手にドアを閉めた。

「まあ、そうかつかするなよ」

藤巻先生に悪気はない。話に夢中になって、他のことをつかのま忘れてしまっていただけで、息子を傷つけるつもりはさらさらなかったに違いない。「様子を見てきます」と僕が席を立ったときも、なにが起きたのか腑に落ちない様子できよんとしていた。

「別にしてない」

和也は投げやりに言い捨てる。

「昔から知ってるもの。あのひとは、おれのことなんか興味がない」

腕組みして壁にもたれ、暗い目つきで僕を見据えた。

「でも、おれも先生みたいに頭がよかったら、違ったのかな」

「え？」

「親父があんなに楽しそうにしてるの、はじめて見たよ。いつも家ではたいくつなんだろーね。おれたちじゃ話し相手になれないもんね」

うつむいた和也を、僕はまじまじと見た。妙に落ち着かない気分になっていた。胸の内側をひつかかれたような。むずがゆいような、ちりちりと痛むような。

唐突に、思い出す。

状況はまったく違うが、僕もかつて打ちのめされたのだった。自分の親が、これまで見せたこともない顔をしているのを目のあたりにして。母に恋人を紹介されたとき、僕は和也と同じ十五歳だった。こんなに幸せそうな母をはじめて見た、と思った。

「どうせ、おれはばかだから。親父にはついていけないよ。さっきの話じゃないけど、なにを考えてるんだか、おれにはちつともわかんない」

僕は小さく息を吸って、口を開いた。

「僕にもわからないよ。きみのお父さんが、なにを考えているのか」

和也が探るように目をすがめた。僕は机に放り出されたスケッチブックを手にとった。

「僕が家庭教師を頼まれたとき、なんて言われたと思う？」

和也は答えない。身じろぎもしない。

「学校の成績をそう気にすることもないんじゃないか、ってお父さんはおっしゃった。得意なことを好きにやらせるほうが、本人のためになるだろうってね」

色あせた表紙をめくってみる。ページ全体が青いクレヨンで丹念に塗りつぶされている。白いさざ波のような模様は、巻積雲だろー。

「よく覚えてるよ。意外だったから」

次のページも、そのまた次も、空の絵だった。一枚ごとに、空の色も雲のかたちも違う。確かに力作ぞろいだ。

「藤巻先生はとても熱心な研究者だ。もしも僕だったら、息子も自分と同じように、学問の道に進ませようとするだろうね。本人が望もうが、望むまいが」

僕は手をとめた。開いたページには、今の季節におなじみのもくもくと不穩にふくらんだ積雲が、繊細な陰翳までつけて描かれている。

「わからないひとだよ、きみのお父さんは」

わからないことだらけだよ、この世界は——まさに先ほど先生自身が口にした言葉を、僕は思い返していた。

「Wだからこそ、おもしろい。」

「注」 \* 院生Ⅱ大学院に在籍する学生。

( 『博士の長靴』 灌羽 麻子 )

問一 次の文は本文中の登場人物について整理したものです。「a」・「b」に入る最もふさわしい言葉をそれぞれ本文中から探し、指定された字数で抜き出してください。

藤巻先生の教え子である僕は、先生の「a 二字」である和世の「b 四字」をしている。

問二 一線①「処暑」とは、曆（にま）による季節区分を示す二十四節気の一つです。次に記した二十四節気の表の中で、「処暑」の時期として適当なものを表のあくの中（なか）から一つ選び、記号で答えなさい。

ア
雨水 <small>うすい</small>
啓蟄 <small>けいちつ</small>
春分 <small>しゅんぶん</small>
清明 <small>せいめい</small>
穀雨 <small>こくう</small>
立夏 <small>りっか</small>
小満 <small>しょうまん</small>
芒種 <small>ぼうしゅ</small>
夏至 <small>げし</small>
小暑 <small>しょうしょ</small>
イ
立秋 <small>りっしゅう</small>
ウ
白露 <small>はくろ</small>
秋分 <small>しゅうぶん</small>
寒露 <small>かんろ</small>
霜降 <small>そうこう</small>
エ
小雪 <small>しょうせつ</small>
大雪 <small>たいせつ</small>
オ
小寒 <small>しょうかん</small>
大寒 <small>だいかん</small>



問三 —線②「和也は僕に向かつて眉を上げてみせ、母親とも目を見かわした」とありますが、ここでの和也の様子として最も適

当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 何かに没頭している父親の姿がほほえましく、母親と一緒にそと見守っている様子。

イ 父親の反応に困るものの、研究熱心な姿に尊敬の念を抱かざるを得ないでいる様子。

ウ 繰り返される無反応な父親の姿に半ば呆れぎみになりながら、同意を求めている様子。

エ 呼んでも無視する父親の姿に戸惑い、何も言わない母親にも不信感を抱いている様子。

オ 研究に夢中になっている父親の姿を理解できず、怒りを隠しきれないでいる様子。

問四 —線③「僕は赤面した」とありますが、その理由として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 台風の構造と進路に関することが興味深い内容であるところ、新聞では洪水など台風がもたらした大きな被害ばかりが取り上げられていることに、気象を研究している者として不満を抱いたから。

イ 台風の被害が相次いだことは気象を研究している者にとって大きな関心事であり、さりげなさを装っているようでも、熱い議論が交わされる気配に興奮してしまったから。

ウ 気象を研究している者にとって、台風の被害が生じた原因を把握しようとするのが当たり前とも思えるのに、やる気のない調子で応答し関心を示さない院生に怒りを覚えたから。

エ 世間で取りざたされる悲惨な被害のほうに気をとられてしまっていたが、気象を研究している者であれば、豪雨をもたらした気象そのものに関心が向いて当然であったと、自分自身を恥ずかしく思ったから。

オ 気象を研究している者であれば、自然による災害が生じる仕組みは周知のことにもかかわらず、知ったかぶりして先輩に教えるという出過ぎた行為をしてしまったことを反省したから。

問五 二重線〈Ⅰ〉「和也がいぶかしげに眉根を寄せた」・〈Ⅱ〉「和也はまだ釈然としないう様子で首をすくめている」の間に交わされた会話AとGの中で、藤巻先生の発言をすべて選び、アルファベットを順番通りに答えなさい。

問六 ④「冗談めかしてませ返しつつ、和也はまんざらでもなさそうに立ちあがった」とありますが、この行動から和也のどのような様子が読み取れますか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 思いがけず父親に自分の絵をほめられ、照れくささを取りつくろいながら、うれしさを隠しきれないでいる様子。

イ 楽しいこともなくたくつな日常の中、父親が自分の絵を見たいと言い出したことが意外で、興奮している様子。

ウ 今まで父親にほめられたことがないのに、母親と一緒に自分の絵をほめてくれたことに、喜んでいる様子。

エ ふだんはめつたに人をほめない父親が自分をほめたことに驚き、うれしい反面不安もあり、浮足立っている様子。

オ 父親が自分に関心を示してくれたことがうれしく、今すぐに父親に自分の絵を見せたいと、気が急いでいる様子。

問七 ⑤「少なからず責任を感じたからだ」とありますが、なぜ「僕」は「少なからず責任を感じた」のですか。その理由を六十字以内で答えなさい。

問八 二重線〈Ⅲ〉「だからこそ、おもしろい」・〈Ⅳ〉「だからこそ、おもしろい」の説明として最も適当なものを次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア 科学者であるにもかかわらず、子どもの才能に期待する父親らしさをも兼ね備えていることに違和感を覚えている。

イ この世界の現象はわからないことがあるからこそ、知りたいという衝動にかられるものだと感じている。

ウ 優秀な科学者の子どもが空の現象を客観的に写し取っていることに、血筋は争えないと興味深く思っている。

エ 世の中は、考えれば考えるほどわからないことばかりが生じるので、研究を続ける社会的価値があると考えている。

オ 科学者然としていた先生の意外な一面に触れた出来事が思い起こされ、あらためて先生の人間性に好感を抱いている。

問九 本文の内容と表現の特徴についての説明として最も適当なものを次のア～カの中から二つ**選び**、記号で答えなさい。

ア 藤巻先生は、興味のあることには周囲のことが何も見えなくなるほどの集中力が働くが、他人の気持ちを汲み取ったり相手に寄り添ったりするなどの細かい気配りが苦手な人物として描かれている。

イ 「険しい目つき」「ふてくされたような口ぶり」「投げやりに言い捨てる」「腕組みして壁にもたれ」などには、和也の父親に対する反発が垣間見られ、反抗期の少年の荒々しく粗雑な性格が鮮やかに印象づけられている。

ウ 藤巻先生の描写には、「和也が呼んでも応えない」「うん、と先生はおざなりな生返事をしたきり、見向きもしない」など、家族よりも研究を優先しなければならぬ、科学者としての姿勢が貫かれている。

エ 立派な科学者を父親に持つ和也は、頭がよくない自分を卑屈に感じていて、研究の内容を理解できる「僕」とだけ楽しそうに話す自分の父親を「あのひと」呼ばわりすることで、「僕」にも嫉妬の感情をぶつけている。

オ 「母に恋人を紹介されたとき、僕は和也と同じ十五歳だった」と、唐突に「僕」の回想シーンが挿入されるが、それによつて当時の「僕」の苦しみと今の和也の苦しみが重層的に表現されている。

カ 最後に「僕」の問いかけに返答もせず身じろぎもしない和也の姿を描写することで、藤巻家独自の恒例行事は中止となり、この後の親子の確執についても解決する見通しがほとんどなくなることが暗示されている。

